

さらば「宗教」から、ようこそ「宗教」へ

宗教はボランティアに負けたのか

阪神大震災が起こった年の10月、国際宗教研究所では「阪神大震災が宗教者に投げかけたもの」というテーマでシンポジウムを開催した。この記録は翌年、『阪神大震災と宗教』（東方出版、1996年）として刊行された。10教団の関係者がそれぞれの救援活動について報告し、それをもとに活発な議論が行われた。

このシンポジウムでは、宗教学者の山折哲雄がコメンテータとして登壇し、宗教者の救援活動に対してきびしい論評をしている。山折氏によれば、宗教者も救援活動を行ったとはいえ、そこには活動の独自性がなかったというのである。つまり宗教者はボランティアとして、またカウンセラーや精神科医のように振る舞ったのであって、宗教者としてではなかった。しかも被災者に対する「心のケア」は、本物のカウンセラーや精神科医のほうが宗教者よりも経験を積んでいるし、信頼も高かった。山折氏のコメントは、ボランティアに対する宗教の敗北とも受け取れるものであった。

これに対し、当然ながら宗教側から数多くの反論が上がった。いわく、宗教者こそ真っ先に動いたし、しかも宗教者であるという自覚なしに動いたのだ。いわく、ボランティアの多くは若者であったが、宗教界でも同様であり、宗教界の中で浮いていた彼らが今こそ自分たちの番だとして動いたのだ。いわく、宗教の貢献が見えにくいのは、実は都会の中で果たしている共同体的な役割が大きいからで、そうした陰の貢献をこそ評価すべきではないか。いや、亡くなった人への供養や遺族への寄り添いと慰藉において、宗教者は実は力を発揮したのだ…と。

しかし、それらの反論に対する山折氏の再反論は無く、両者の意見は物別れに終わってしまった。

さらば「宗教」という逆説

山折氏自身は後に、議論をもう一步進めて、震災時の宗教者の活動が「宗教者として」の活動たりえなかった理由が、宗教の言葉を人々の心に届けることがもはや不可能だったからだとして述べている。家を焼かれたり震災で苦しんでいる人々に対しては、聖書や仏典の言葉をただそれだけ語っても絶対に通じないことを、宗教者自身が自覚していたからこそ、ボランティアやカウンセラーとして振る舞わざるをえなかったというわけだ。

山折氏はこの見解を、『さまよえる日本宗教』（中央公論新社、2004年）の中の一論考で述べている。そのタイトルも「さらば『宗教』—歴史的宗教の賞味期限」と、センセーショナルなものである。現代においては、イエスや仏陀の言葉を繰り返しても、もはやなんのインパクトもない。宗教の言葉は、近代文明の言語体系の大波に呑み込まれて断片化され、固有の生命力を奪われてしまった。宗教言語が不通の中、宗教的ニヒリズムが蔓延し、普遍宗教をいくら標榜しようが、歴史的宗教の耐用年数はここにきて尽きてしまったという。

しかし、山折氏のこの主張は逆説的な表現として受け取るべきであろう。山折氏も、宗教者が人々の心に近づこうとするなら、もはや宗教言語の普遍性に拘泥することなく、その者がイ

エスや仏陀のように生きるほかないのではないかと示唆している。そして、現代の我が国において、宗教者ならではの活動が可能な場面として、「宗教介護」があるのではないかと主張する。老人が終末期を迎えるとき、宗教が突風のように押し寄せてくるだろう。そうした臨終の場において、宗教が何たるものかが問われるのである。

実を言うと、すでに山折氏は上述のシンポジウムでも、ボランティアの救援が終わったところから、宗教者として真価が問われる出番があるのではないかと、問いを投げかけている。カウンセラーや精神科医によっても癒されない人間に対してこそ、宗教者の存在と役割が問われるだろう。宗教の言葉でないと救われず、ぎりぎりの限界状況にある人間に対してこそ、宗教者は身を持ってその言葉を自らの言語として送り届けなくてはならないのである。

たすけ心こそ宗教の心

ただ、宗教者の震災ボランティアについてさらに言うならば、私自身は、宗教者はボランティアに敗北したとは決して思わない。困窮した人を助けたいという思いが、宗教者・非宗教者を問わず現われたのが、正にあの震災時であった。実は、その止むにやまれぬ思いこそが、内なる宗教心の発露ではなかったのか。本来はきわめて宗教的なのに、世俗化されたジャーナリズムの眼差しの下にそうでないと思わされているだけではないのか。もし宗教の敗北があったら、宗教者までがそう思ってしまったということではないか。

実際の救援の過程においては、言葉にはうまく言い表せないけれども、人と人とのさまざまな精神的=霊的交流、やり取りがあったはずである。しかし、誰もがボランティアという便利な言葉を使用することによって、その種々の具体相がかえって見えなくなってしまった。とりわけ問題なのは、宗教者までが自分たちの活動をボランティアという通りの良い言葉に還元してしまったということだ。この言葉ばかりが、のっぺらぼうの通貨のように横行し、そして今でも大手を振って歩きまわっているのである。

震災以降、ボランティアの組織化の必要性が認識され、全国にNGO・NPOが次々と出現している。これらの団体には宗教系もあれば、そうでないものもある。もし既成宗教のどの教団やどの寺院・教会でも、人々のたすけ心をそのまま宗教心として取り込む言語回路を有し、それをさまざまな現場で発揮させるような組織作りをするならば、きっとその宗教組織は伸びていくはずである。

社会貢献、社会参加というかけ声が声高に聞こえてくる時代になった。それが耳障りに聞こえ、自らの生き残りの方便だからしかたないと、宗教側が消極的に捉えるならば、人々からその下心を見透かされるだろう。そもそも、これでは宗教者自身の意気も上がらない。逆に、これこそが我々の教えの発揮、救いの実現なのだとして積極的に捉えるならば、社会もそれを受け入れてくれるはずだし、活動する宗教者も確実に元気に勇むであろう。山折氏は「さらば『宗教』」と語ったが、そのときこそ、「ようこそ『宗教』」と歓迎したいものである。